僕が許した父

栗原峰幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕が許した父

【Ｎコード】
Ｎ３９４１Ｉ

【作者名】
栗原峰幸

【あらすじ】
夜勤明けのある朝。僕は福祉事務所の澤井さんという人からの電話で起こされる。電話は湯河原で生活保護を受けている父の訃報を知らせるものだった。
父は母に言われ無き暴力を振るい、母と僕は湯河原から川崎まで逃げてきたのだ。いまさら他人だと僕は突っぱねるが、澤井さんは遺骨だけでも引き取って欲しいという。
母の揺れる気持ちを知り、僕は火葬場に向かう。

第一話

僕が布団に潜ってどのくらい経っただろうか。
無粋な電話の音で、僕は眠りから強制的に起こされた。
（畜生……。誰だ、一体。人が夜勤明けで寝ているっていう時に……）
僕は鉛のような体を引きずって、電話の子機を手に取った。
「はい、もしもし」
「柳田光治さんでいらっしゃいますか？」
聞き馴れない男の声だ。僕は一瞬、何かの電話セールスかと疑う。
「はい、そうですが」
「突然のお電話、失礼致します。私は神奈川県の小田原保健福祉事務所の澤井と申します」
僕はその名前を聞いて、嫌な予感がした。その澤井さんは続ける。
「実はお父様の長太郎さんが、お亡くなりになりました」
「はあ……。で、僕にどうしろと言うんですか？」
そう言う僕の口調は、かなり突っ慳貪だったかもしれない。
「お父様と光治さんとの関係が悪かったことは、私も存じ上げております。ただ、お父様は身寄りが他にいないんですよ。お葬式だけでも上げて戴けないかと思いまして」
「お断りします！　あんな奴、父親でも何でもありませんよ！」
僕は口調を荒げた。子機に自分の唾がかかるのがわかる。
「それでは、せめてお骨だけでも引き取って戴けませんでしょうかね？　私どもは葬儀まではできても、お骨までは預かれないんですよ」
まだ半分眠っている僕の頭には、その言葉がやや事務的に聞こえた。
「いい加減にしてください。何で今更他人の骨を引き取る必要があるんですか？」

「そうは言ってもね、お父様、最後は光治さんに会いたいって言っていましたよ。好きだったお酒も断って、いつも家族の写真を眺めていたんですよ。最後は湯河原の自宅で亡くなっているのを、ヘルパーさんに発見されたんです」

そう言う澤井さんの声は、どことなくしみじみとしていた。だが僕には父が酒を断ち、家族を思い出す姿など想像できない。

「ちょっと、考えさせてください」

「お父様は明日、荼毘に付されます。できれば今日の夕方までにご連絡戴けますか？」

「わかりました」

僕は子機のスイッチを切った。同時に胸の中にドロドロとした感情が渦巻く。

僕の勤務する製鉄所は同じ勤務が一週間続く。今夜も夜勤だ。それまでには答えを出さなければならない。僕は暗澹たる思いで布団を被った。しかしそれからは寝付けなかった。

父が湯河原町で生活保護を受けていたことは知っていた。以前にも福祉事務所から、僕のところに「扶養届」なる文書が送られてきたこともある。もちろん僕は、扶養はできないし、する気もない旨を記載して返送した。

僕は湯河原町の土肥というところで生まれ、高校生の時までそこに住んでいた。

土建屋で働いていた父は、酒を飲んでは、よく母に暴力を振るった。雨で仕事が休みの日など、朝から酒を飲んでは絡んできたものだ。母の話では、給食費が酒代に消えたこともあったらしい。

今で言えば、父の暴力はドメスティック・バイオレンス（配偶者・恋人からの暴力）と言ったところだが、当時はそんな言葉もなかった。

父の母に対する暴力に理由などなかった。「家事が遅い」だの「酒が足りない」だの、ただ因縁をつけては、ひたすら暴力を振るって

いたのだ。母はただじっと、父の言われ無き暴力に耐えていたのである。僕もまた、そんな母が殴られるのを黙って見て、怯えながら耐えるしかなかった。子供心にも、自分が大人になったら、父のようにはなるまいと思ったものである。いわゆる反面教師というやつだ。

だがそんな母も、ついに堪忍袋の緒が切れる時が来た。僕が高校を卒業すると同時に、僕と一緒に川崎に家出したのだ。僕は川崎の製鉄所に就職が決まっていたので、母と安いアパートを借りることにした。

湯河原の家も安い平家の借家だったので、住めば都だった。

その後、母は父との離婚に向けて、裁判を起こすことになるが、それからが長い道程だった。家庭裁判所の調停まで二年はかかったと思う。

僕が母と川崎に来てからは、一度も湯河原に足を向けていない。湯河原は母や僕にとって「鬼門」だったのである。そればかりではない。いつしか、西へ向かうことさえ、忌み嫌うようになっていた。

だがここのところ、母もようやく明るさを取り戻してきた。今は午前中のみ、スーパーで清掃のパートをしている。六十を過ぎた母の年齢から考えれば、使ってくれるところがあるだけでも有り難い。いわゆる、生きがいとしての仕事だ。

問題は先程の福祉事務所からの電話を、どう母に伝えるかだ。僕は枕を抱きながら、虚ろな目を天井に泳がせた。

ギィーッ……。

建て付けの悪い、安普請のドアが開く音がする。どうやら母が帰宅したようだ。

母はなるべく物音を立てないように、忍び足で歩く。夜勤明けで寝ている、僕への配慮だ。

「母さん、お帰り」

「あら、光ちゃん、起きていたの？」

母が驚いたような顔で僕を見た。
「ああ、寝付けなくってね」
「今夜も夜勤なんだから、横になっておいた方がいいわよ」
母がスーパーのビニール袋から夕食の食材を取り出し、冷蔵庫に入れる。その後ろ姿が平凡で、どこにでもありそうな幸せだった。
僕は怖かった。もし父の死を母に伝え、この平凡な幸せが、一瞬で脆くも崩れ去ったとしたら。そう思うと、躊躇わざるを得なかった。
それでも母の耳には一応入れておかねばなるまい。僕は意を決し、母の背中に声を掛けた。
「あのさあ。さっき、福祉事務所の澤井さんって人から電話があったんだけど、親父が死んだらしいよ」
母の背中が一瞬、ビクッと跳ねた。開け放した冷蔵庫の冷気が伝わる。母の手にはネギが握られたままだ。
「そう……」
母はそう呟くと、ネギを冷蔵庫に仕舞った。そしてそのまま俯き、固まってしまった。
沈黙の時間が流れる。張り詰めた空気が、異様に重かった。
「福祉事務所は骨を引き取ってくれって言っていたけど、あんな奴の骨を拾ってやらなくてもいいよね？」
緊張に耐え切れず、思わず僕は母に同意を求めた。これが僕の本心だ。
しかし母は「はあーっ」と深いため息をつくと、意外な言葉を返したのである。
「あんな人でも、光ちゃんのたった一人の父親なんだよ。私にとっては、もう赤の他人だけどね。お骨を拾ってやるか、やらないかは、光ちゃんが自分で決めて頂戴」
母は僕に背中を向けたまま、力のない声で言った。
僕は混沌とした自分の気持ちが、更に掻き乱されたような気がした。

「だって、母さんにあれだけ暴力を振るった親父じゃないか。僕だって耐えていたんだ。母さんが殴られているのを、ただ怯えて見ているしかないのを。僕だって辛かったんだ。だから、あんな親父なんか死んだって関係ないさ。そうさ、あいつは親父なんかじゃない！」

僕は一気に巻くし立てた。

母は何も言わず、そのまま台所へ行き、昼食の準備を始めようとする。

「母さん、何か言ってくれよ！」

本当はこれ以上、母を追い詰めてはいけないことは承知していた。しかし意外な母の言葉に混乱を来した僕の頭は、目の前にいる母に救いを求めるしかなかったのだ。

「だから言っただろう。お前の父親のことなんだから、お前が決めなさい。もう大人なんだから」

「そんなこと言ったって……」

「ひとつだけ言っておくわ」

母がやるせない顔をして振り返る。その表情は、そうだ、父と暮らしていた時の、暗く淀んだ母の表情だ。僕はこの時、少しばかり母を追い詰めてしまったと後悔した。

「何だい？」

「お父さんとお母さんはね、あれでも好いて一緒になった仲なんだよ。あんな人でもね、逃げる時は本当に後ろ髪を惹かれる思いだったんだよ。あの人はね、誰かが側についていなきゃ、だめな人なんだよ」

母がエプロンで瞼を拭った。目尻にできた小皺が光っている。

僕はまだ母が父を愛していることを知った。しかしこの時、正直なところ、僕には母の気持ちが理解できなかった。ただ、母が僕に父の遺骨を拾ってほしいと訴えているような気がしてならなかった。母の願いとならば、聞いてやらねばなるまい。

僕は電話の受話器を持ち上げて、自分を確かめるように数字を押

す。電話のコールが異様に長く感じられた。
「お待たせしました。小田原合同庁舎でございます」
品の良い、柔らかな女性の声に後押しされて僕は言った。
「福祉事務所の澤井さんをお願いします」

その夜、僕は製鉄所の溶鉱炉の中を眺めていた。
ドロドロに溶かされた鉄は対流し、まるで生物のように蠢いている。僕はいつもこの光景を見て思う。鉄は生きているのではないのかと。
僕は汗を拭った。作業服の中はいつも蒸れている。ここでは常に、夏とは呼べない暑さが支配しているのだ。
「よう、どうした？　ぼんやりして」
コンビを組む柿澤先輩が声を掛けてくれた。気さくな中年の先輩で、僕の面倒をよく見てくれる。そんな彼を僕は慕っていた。
「いや、いつも思うんですよね。鉄って生きているんじゃないかって」
僕が溶鉱炉の中を覗き込みながらそう言うと、柿澤先輩も灼熱の泥流を覗き込む。
「そうよ。鉄は生きているんだ。何せ俺たちが魂を込めて作っているんだからな」
僕は柿澤先輩の横顔を覗いた。その顔は自信と男の誇りに満ちていた。
「そうですよね……」
僕も自分の仕事に自信と誇りを持ちたかった。しかし毎日繰り返される同じような作業は決して面白いものではない。
毎日、煤けた商店街を抜けて製鉄所の門をくぐる。そして繰り返される単調な作業は、半ば諦めに似た感情を僕に抱かせる。
時々、レバーを引く自分の手が機械のように思えることがある。製鉄所という要塞に配置された部品。そんなふうに自分のことを感じることがあるのだ。

給与にしても振込みで、もらうのは薄っぺらな明細書のみだ。これでは働いて金銭を得たという実感が湧かない。それでも食べていくには働かねばならない。僕の胸の中は溶鉱炉のように熱くはなく、いつも不完全燃焼状態だった。

「この鉄も冷えて製品になる。そこから先は生かすも殺すも使い手次第だ」

「えっ？」

僕はその言葉に一瞬、心臓がドキッとした。自分でも脈が乱れたのがわかる。

「人も同じよ。生まれた時にはまっさらだし、良く生きようと自然に努力するもんだ。本能でな。でもそのうちに不純物が混じったり、自分自身の使い方を間違ったりしちまうんだなあ」

柿澤先輩がしみじみと言った。少し脂ぎった顔に汗が滴っている。

「そうだ、ボーナスが出たら、久々にパーッと夜遊びでも行くか？」

柿澤先輩がニタリと笑って僕の方を向いた。

「いや、今はそんな心境じゃないんです。父が死んだんですよ」

「ほう、あのお袋さんと逃げてきたっていう……」

「ええ、もう赤の他人だと思っていたんですがね。福祉事務所から電話があって骨だけでも引き取って欲しいって……」

「そうか……」

柿澤先輩は腕組みをし、目を瞑った。仕事の時に見せる真剣な顔とは違い、神妙な顔つきだ。

「俺もな、親父の死に目には会えなかったんだよ。まあ、それほど仲の悪い親子じゃなかったけれどな。親父の遺骨を埋葬する時、お寺さんに無縁仏があってよ。それが薄汚えんだ。あんなところに埋葬されるのは可哀想だって思った記憶があるなあ」

「無縁仏……ですか？」

「手入れなんかされていなければ、誰も花ひとつ供えちゃくれねえ。きっと死んだことすら忘れ去られた人たちの墓なんだろうな」

僕は父が無縁仏に埋葬され、そのまま永遠に生きていた証まで抹

消されるイメージが広がった。
（あんな親父なんて……）
そう思う反面、母の揺れる思いが僕の心を揺さぶる。
溶鉱炉の鉄は対流を続け、高鳴る僕の心臓のように脈打っていた。
「今しかできないことってあるぞ。俺の人生なんか後悔だらけだ」
そう言って笑顔を作る柿澤先輩の目は、笑ってはいなかった。
僕は溶鉱炉の中で蠢く、溶解した鉄を見つめ続けた。

翌朝、夜勤明けで喪服に着替えた僕は東海道線に飛び乗った。父の火葬は午後一時半から、真鶴町にある火葬場で執り行われるという。
朝の東海道線は混み合っていた。川崎駅から乗っても、既に空いている席はない。夜勤明けで真鶴まで立ちっぱなしは少々きつい。
だが藤沢駅でドッと人が降りた。僕は対面式シートの窓側に座ることができた。以前は硬く、座り心地が悪かったシートも、今は改良されている。しかしお尻の辺りがモゾモゾとして、座り心地が良いわけではなかった。それは僕が父に会いに行くのを、心の奥底で拒んでいるからに他ならない。決してシートのせいではなかった。
早川駅を過ぎると、左手には海が広がる。深い青に太陽の光が眩しく反射し、銀をちりばめたようだ。僕は思わず目を細めた。磯場には波が豪快に打ち付けられる。
観光客にとっては絶景であるこの景色も、今の僕にとっては重苦しい、淀んだ景色に過ぎない。磯場に打ち付ける白波もまるで牙のようだ。それは線路が進むにつれ、僕の心に重くのしかかってくる。
ふと、深海の海底に降り積もるマリンスノーのイメージが浮かんだ。それは決して綺麗なものではなく、僕の胸の中に降り積もりながら、淀んでいく澱だった。

第二話

真鶴駅に着いた時、どうしようもない不安に駆られた。
（ついに来てしまった……）
そんな思いでホームを踏み締める。電車が去った後、弓なりに曲がるホームを見渡すと、まばらな人影が改札へと降りていく。喪服を着ているのは僕くらいだ。
（そうだ。誰も親父の葬儀に来たりはしない。来るはずがない）
そう思いながら階段を下った。駅は昔とたいして変わっていないが、いつの間にかエスカレーターとエレベーターが設置され、改札も自動改札になっている。
火葬場は真鶴のちょうど駅裏あたりにある。歩けば四、五分といったところか。
（まだ早いな）
何せ、朝食を済ませてすぐに家を飛び出してきたのだ。父の火葬の時間は午後一時半だ。時計を見るとまだ午前十一時だった。
（どうしようかな？）
こういう時の時間つぶしは一番困る。
食欲はまったくなかったが、駅の脇の売店でサンドイッチを二つと缶コーヒーを買う。まだ胃の中には朝食が残っている感じだった。
それでも何か物事の前には、しっかりと食べておかねばならない。小さい頃、食費が父の酒代に消え、ひもじい思いをしたこともあった。
食事は愛を表すという人もいる。いつも家の食事は貧しかった。それでも母は工夫して、僕に精一杯の愛情を注いでくれた。だが、食べ盛りの僕には少ない量だったのである。それは片親しかいない寂しさに、どこか似ていた。
だから僕の食へのこだわりはトラウマのひとつなのかもしれない。そう、満たされないお腹と心を常に一杯にしておかないとならない

という、強迫観念に近いものとでも言えるだろうか。
僕はサンドイッチと缶コーヒーの入ったビニール袋をぶら下げて、駅前の地下道を潜った。魚の絵が描かれたその地下道は、その暗さと相俟って、まるで深海の中にいるような気分だ。先程の心に降り積もる澱を思い出す。
地下道を抜けると僕は迷った。真鶴漁港の方へ行こうか、それとも岩海岸の方へ行こうかと。
結局、僕の足は岩海岸の方へ向いた。なだらかな坂を下り、真鶴町役場の前を通る。そして今度は少し急な坂を下れば岩海岸だ。坂の途中で湾曲した砂浜が見えてきた。
名称は岩海岸というが、そこは砂浜だ。坂から見ると奥の方にゴロタ石の岩場が少しある。「岩」というのは地名なのだ。この海岸も夏になれば海水浴客で賑わう。
僕は小学校高学年から中学校くらいにかけて、よくこの辺りまで自転車できた。
道を下って左手に遠藤貝類博物館がある。それも昔のままだ。少しホッとしたような気がした。ただ農協がなくなり、公衆便所だけが新しく設置されている。それも整備され、綺麗だ。
僕は砂浜に下りる階段に腰を降ろした。
寄せては返す波を、ただボーッと眺める。真鶴道路の橋がのどかな風景を邪魔しているようにも思えるが、これを名所とする声もある。
（物は考えようだな……）
自然と人工物が織り混ざった風景に、ふと、そんなことを考えたりもした。
僕はビニール袋からサンドイッチを取り出すと、頬張った。シャキシャキのレタスの食感が心地よい。
砂浜では一人の老婆が何かを拾っていた。貝殻のような乙女チックなものではないだろう。手にしているのはどう見てもゴミだ。
（ゴミ拾いかな？）

そう思いながら眺める。老婆は黙々とゴミを拾っている。
僕に気付いた老婆が、人懐っこい笑顔を湛えて近づいてきた。だがその視線は僕の手にあるサンドイッチへと向けられている。
「縁起の悪そうな服を着ている割には、美味しそうなもの食べているね。あたしゃ、もう二日、何も食べていないよ」
ボサボサの白髪頭に、皺だらけの老婆は笑顔でそう呟いた。その言葉に切迫感はなかったが、空腹であることに違いはないだろう。
「よかったら、お婆ちゃんも食べる？」
僕は残りのサンドイッチを差し出した。
「あたしゃ、これでも若いんだよ。『お婆ちゃん』なんて呼ばれる齢じゃないんだ」
老婆のプライドは思ったより高いようだった。それでも笑顔は絶やさない。
「でも、ありがとさん。せっかくだから、もらっておこうかね」
狡猾だが、どこか憎めない老婆は、皺だらけの顔を更に皺くちゃにして笑った。
僕も思わず苦笑して、サンドイッチを渡してしまった。
「あー、やっとオマンマにありつけたよ。あんた、いい男だね」
「それはどうも」
どうやら老婆にとって、サンドイッチが一番の収穫だったらしい。彼女は重たそうな体を引きずりながら、遠藤貝類博物館の向こうへと消えていった。その風景がまるで昭和時代の映画フィルムのようであった。
僕が老婆を見送っている間も、海からの潮風は僕の髪を撫で続けた。
何故か老婆の姿が心に焼き付いた。毒づきながらも礼を言い、僕を「いい男」と呼んでくれた老婆とのひとときは、火葬場に向かう前のちょっとした息抜きになったような気がした。
僕は海をもう一度、見渡すと岩海岸を後にした。

駅に戻って歩道橋を渡り、真鶴中学校の前から駅の裏の方へ回って歩く。この辺りも、昔はよく自転車で来たものだ。
僕は火葬場の前で立ち止まった。小綺麗になった火葬場は何だか父には不釣り合いな気がした。
僕は火葬場の前で立ち止まり、呼吸を整えようと、大きく深呼吸をした。それは大きなため息だったかもしれない。先程の老婆との会話で少し気持ちが和んだとはいえ、やはり棄てた父と対面するのは緊張するものだ。
「柳田光治さんですね？」
火葬場の入り口にいた喪服姿の若い男が歩み寄って来た。いかにも温和そうな好青年といった印象だ。齢の頃は僕とそれほど変わらないだろう。
「はい、そうですが……」
「初めまして。小田原保健福祉事務所の澤井です。先日はお電話で失礼致しました」
澤井さんが深々と頭を下げた。慇懃なお役人のイメージとは程遠い。
「いえ、こちらこそ。あんな父のために、いろいろとしてくださってありがとうございます」
僕も失礼のないように丁重に頭を下げた。
「さあ、中でお父様がお待ちですよ」
僕は澤井さんに促され、火葬場の中へと足を踏み入れた。ここまできて足を留めても仕方あるまい。火葬場の中にカツカツと革靴の音が異様に大きく響いた。
既に棺は釜の前に安置されていた。焼き上げた骨を入れる骨壷も、味気無いシンプルなものだが用意されている。
火葬に立ち会うのは僕と澤井さん、葬儀屋さんともう一人、若い女性がいた。その女性はハンカチで目頭を押さえている。
（一体、誰だろう？）
そんな僕の疑問に答えるように澤井さんが女性を紹介してくれた。

「こちらがお父様を発見してくださった、ヘルパーの阿部さんです」
阿部さんがハンカチで顔を押さえながら会釈する。
「どうも、父がお世話になりました」
一体、あんな父を世話する物好きなヘルパーなどいるものだろうかと、僕は阿部さんの顔をまじまじと見つめてしまった。
「さあ、それでは故人との最後のご対面でございます」
葬儀屋さんが棺の蓋を開ける。正直言って、僕は父の顔を見るのを躊躇った。だが僕に遠慮をしているのだろう。澤井さんも阿部さんも歩み寄ろうとはしない。仕方なく僕は棺の中を覗き込んだ。
父はそこに横たわっていた。生活保護の葬儀では花はつかないらしい。絹に似せた布に包まれて父は眠っていた。
それは穏やかな顔だった。口元に薄っすらと笑みさえ浮かべているではないか。
これがあの、毎日酒を飲んでは怒り狂い、母親に暴力を振るっていた父の顔とは思えなかった。そう、その顔はまるで悟りを開いた仏のような、別人の顔だったのである。
僕は自然と父に向かって手を合わせた。特に意識したつもりはなかった。何故か父の顔を見ていると、合掌せずにはいられなくなったのだ。
続いて澤井さんと阿部さんが覗き込み、合掌をする。
「本当、最後に息子さんに会えてよかったわね」
阿部さんが涙ながらに呟いた。
「父の死因は何だったんですか？」
僕は澤井さんに尋ねた。
「死亡診断書には心不全と書かれていました。司法解剖も行政解剖も行われなかったので、事件性はないと警察は判断したのでしょう」
澤井さんは淡々と答えた。
「でもね、長太郎さんは最後の方はかなり弱っていたのよ。お風呂に入るにも、トイレに入るにもかなり辛そうでした。本当はもっと援助できればよかったんでしょうけど、要支援２では限界があった

のよ」
　阿部さんが涙ぐんだ声で言った。
「要支援２？」
「介護保険の基準ですよ。その人の介護度を定めた基準でサービスの量が決まっているんです」
　代わって答えてくれたのは澤井さんだった。僕には福祉の制度がどうなっているのかよくはわからない。ただ父にそれほど手厚い介護はなされていなかったようだ。
「それでは、そろそろお別れです」
　葬儀屋さんのその言葉で、父の棺が閉じられた。
　重々しい音を立てて釜の蓋が開く。自動扉だが、何せ人を焼く釜だ。その音はたとえ、あんな父を焼く釜とはいえ重い。
　僕は合掌して父を見送った。

　父を火葬している間、僕たちは待合室で待つことになった。
　阿部さんが気を利かしてお茶を淹れてくれた。啜ってみると、製鉄所のお茶と大差のない味だ。いや、この時、僕の味覚は麻痺していたかもしれない。
「これね、長太郎さんが最後に握り締めていた写真よ」
　阿部さんがそう言って差し出したのは、一枚の写真だった。僕が小学校六年生の時、湯河原の万葉公園で撮った家族の写真だ。確か通りがかりの人にシャッターを押してもらった記憶がある。僕はわざと大きな口を開け、おどけた顔をしている。父は真面目そうな顔でカメラを見つめ、母はにっこりと笑いながら僕の肩に手を置いている。それはカラー写真だが、既に色あせてセピア色に近い。
「これを父が握り締めていたんですか？」
「長太郎さんはね、奥様のことは諦めていたみたい。でも、あなたのことだけは諦めきれなかったようで、いつも光治、光治って取り憑かれたように呟いていたわ。よっぽど悔いが残っていたのね」
「でも、何で笑っていたのかな？」

「最後にその写真を眺めたからじゃないかしら」
写真ひとつで笑って死ねるだろうかと、僕は疑問に思った。
「心不全っていうのは、いわゆる心臓麻痺なんですよ。そいつは相当に苦しいらしいんです。それでも安らかな顔で眠りについたというのは、やはりその写真のお陰なんじゃないですかねえ」
澤井さんがしみじみと言った。
「お父様の生活態度は真面目でした。お酒はもちろん、タバコも吸わない。いつも謙虚でね。私が訪問すると、お国の世話になって申し訳ないって、いつも泣いていましたよ」
澤井さんの口から出た言葉は、僕の知る父とはまるで別人であった。しかし、先程見た顔は、穏やかではあったが確かに父の顔だった。
「父は病院には通っていたんですか？」
「脳梗塞を患いましてね。湯河原厚生年金病院に入院していたことがあるんです。リハビリで単身生活が営めるくらいまで回復しましたが、左半身に少し麻痺が残りましてね。それでヘルパーさんに入ってもらったんですよ」
「なるほど……」
「じゃあ、父はずっとひとりだったんですか？」
「ええ、もちろん。女の人の影は見えませんでしたね。いつも寡黙に小説を読んだりしていてね。どちらかというと、家に閉じこもりがちでしたかね」
あの父が小説を読むなど信じられない。記憶にあるのは下劣な雑誌ばかりだ。母と僕が逃げ出した後の父は、どうやら僕の知っている父ではなくなったらしい。
「父は改心したのかな？」
僕が唸るように呟いた。
「改心というより、もぬけの殻といった印象でした」
阿部さんがやるせない表情でお茶を啜った。

呼び出しがかかり、釜の蓋が開いた。中から薄茶色の骨が係員により引き出される。
それは頑丈そうな骨だった。かつて土建業で鍛えた体ということもあるだろう。大腿骨の辺りなど、そのままの形で残っている。何度も母を蹴りつけた足の残骸がそこにあった。
「これが、親父の骨」
僕は思わず、そう呟いてしまった。
「そう、あなたのお父様の骨ですよ」
澤井さんが僕に寄り添うようにして言った。後ろでは阿部さんのすすり泣く声が聞こえる。
（もぬけの殻か。確かに親父の残骸だな）
そんなことを思いながら、澤井さんと箸で骨を摘まむ。
係員が残りの骨の説明をしながら、手際よく骨壷に収めていった。薄い頭蓋骨が一番上にきている。
「これは埋葬許可書です。これがないとお墓に埋葬できませんから、大切に保管しておいてください」
係員が僕に埋葬許可書を手渡した。その封筒を受け取るのを一瞬、躊躇ったような気もする。しかし気がついた時には、しっかりと受け取っていた。
（この骨をどうしよう……）
僕はこの時、父の遺骨を母の元へ持ち帰ってもよいものかと、まだ迷っていた。おそらく、ようやく落ち着きを取り戻した母の心を、激しく揺さぶるに違いない。
澤井さんが埋葬許可書の上に先程の写真を乗せてくれた。どうやら待合室のテーブルに僕が置き忘れていたようだ。
その写真を見て僕の心は決まった。
「明日、お父さんの家の片付けをするんですが、もしよかったら一緒に来てもらえませんか？」
澤井さんが静かに言った。
僕は明日から二日間の公休に入る。手伝うことは可能だ。だが、

家の片付けまで福祉事務所がやるものだろうか。
「家の片付けを福祉事務所がやるんですか？」
「他にやる人がいなければ仕方ないでしょう。誰かがやらなきゃならないんです。大家さんに苦情を言われるのも我々ですからね。生活保護は生きている間はお金を出せますが、亡くなった後の片付けの費用までは出せないんですよ」
僕は片付けを行政に任せる後ろめたさと、父が人生の終焉を迎えた場所をこの目で確かめたい気持ちが入り混じり、了解しようと決めた。
「わかりました。是非、僕にも手伝わせてください」
「それでは午後二時に家の前に来ていただけますか？　家の場所、覚えていらっしゃいますよね？」
「はい」
僕は力強く頷き返した。

父の家の片付けの約束までし、川崎まで戻ってきたが、いざ自分のアパートの前まで来ると、足取りが重くなった。錆びた階段を一歩一歩上る。親父の遺骨が異様に重かった。
部屋のドアの前までは来たものの、開けるのをつい躊躇ってしまう。向こうには母がいるのだ。父にさんざん痛め付けられてきた母が。
それでも、ここまで来て引き返すわけにはいかない。僕は思い切ってドアを開けた。
「ただいま」
「おかえりなさい」
落ち着いてはいるが、どこか力の抜けたような母の声が返ってきた。
母は僕を出迎えてはくれなかった。奥の六畳間にいるのだろう。
それでも僕は親父の遺骨を母に見せようと、足を進めた。
（これは僕の務めだ）

自分にそう言い聞かせるが、心臓の鼓動は鳴り止まない。
襖は閉められていた。
ゆっくりと襖を開けると、母は西日のあたる部屋でひとり、正座をしていた。
「それがあの人のお骨かい？」
そう呟いた母の顔が随分と老けて見えた。
「ああ、親父の遺骨だよ……」
僕は母の前に親父の遺骨を置いた。母はそれをじっと眺めている。その瞳は潤んでいるようだった。
「それと」
僕はポケットから一枚の写真を取り出した。阿部さんにもらった万葉公園での写真だ。
「親父は死ぬ時、これを握っていたそうだよ。その死に顔は笑っていた」
そう言うと、母は堰を切ったように泣き崩れた。親父の遺骨にしがみつき、横隔膜が壊れてしまうのではないかと思うくらいの勢いで泣いた。号泣とは、まさにこのようなことを言うのだろう。
そして母は何度も「ごめんね、ごめんね」という言葉を繰り返す。この時、母は心の奥底で、まだ父のことを愛しているのだと思った。でなければ「赤の他人」とまで言った人間に、ここまでの涙を流せるものだろうか。
どうやら僕が両親と過ごした時間と、母が父と過ごした時間は違うらしい。何だか、そんな気がした。
「このお骨、どうしようか？」
「この人には実家なんてないも同然だからね。今更お墓に入れてもらえるかどうか」
母が力なく呟いた。
「やっぱり、我々の手で供養して、お墓に入れてあげるのがいいのかな？」
「光ちゃんが許してあげられるんなら、そうしておやり。こんな人

でも無縁仏じゃ可哀想だからね」
母が涙を拭いながら言った。その目は慈愛に満ちた優しさを湛えている。母の唇が「おかえり」と動いたのを、僕は見逃さなかった。
やはり父の遺骨を持って帰ってきて正解だったと、僕は思った。
その夜は父の遺骨を枕元に置き、母と一緒に寝た。家族三人で寝たのはいつ以来だろうか。
母の布団からすすり泣く声が聞こえた。
僕は夜勤明けで父の火葬まで行き、疲れているはずだった。それでも何故か寝付けない。母への心配と父への複雑な思いが入り混ざり、寝苦しい夜だった。
二人とも眠りについたのは日付が変わってからだろうか。

第三話

翌日の東海道線も混み合っていた。やはり藤沢で窓際の席を取る。今日のシートはしっかりと僕の体重を受け止めてくれた。

早川を過ぎて見る海の景色は昨日と変わらない。輝く海も、寄せる白波も見る者が見れば、心打たれる景色だろう。

ただ、今日は僕の胸の中に降り積もる澱はなく、適度な緊張感と期待感が心を支配していた。

そんな気分で眺める海はいいものだ。

湯河原駅は昔とあまり変わっていなかった。変わったことと言えば、売店が小綺麗になったことと、真鶴駅と同じようにエスカレーターやエレベーターが設置されたこと、自動改札になったことくらいか。

僕は改札を右に出て、信号の角にある「味の大西」というラーメン屋へ向かった。ここは昔、家族でよく食べにきた店だ。

お店に入ると「いらっしゃい」と、若く元気なお兄さんが声を掛けてカウンターへと案内してくれた。

自分では今まで湯河原という地は鬼門だと思っていたが、ここだけはホッとする。何故ならば、ここでよく、家族揃って外食をしたからだ。そしてここで父が酒を飲む時はいつも機嫌がよく、笑いが絶えなかった。僕にとって「味の大西」は、湯河原で唯一、家族の楽しい思い出が詰まった場所と言っていい。

それに店員の愛想のよさも昔と変わらない。僕はここのワンタンメンが好物だ。もっとも子供の頃は量が多すぎて、残りを父が食べていた記憶もある。

程なくして僕の目の前にワンタンメンが運ばれてきた。

ラーメンを啜り、まるでギョーザのようなワンタンを口に入れると、自然に涙が込み上げてくる。父はここで飲む酒のように、何で家でも楽しく飲めなかったのだろうか。そう思うとワンタンメンの

スープに涙が垂れた。
「ティッシュ、ありますよ」
お店のお兄さんがティッシュボックスを取ってくれた。ささやかな心遣いが嬉しかった。鬼門と決めつけていた故郷に温かく迎えられた気がした。

腹ごしらえを済ませた僕は海の方へ向かって歩き始めた。父の家、そう、僕の育った家は湯河原駅から海の方へ向かった土肥というところにある。近所は平家の借家が多く、父の家も借家だ。手入れをしていなければ、かなり老朽化していることだろう。
土肥は道路が碁盤の目のようになっており、しばらくこの地に足を運んでいなかった僕は、恥ずかしくも道に迷ってしまった。昔はなかったコンビニエンスストアも建っている。
コンビニエンスストアでペットボトルのお茶とスポーツドリンクを買った。澤井さんたちへの差し入れだ。きっと力仕事となれば汗も掻くだろう。
しばらく土肥の辺りをウロウロしていると湯河原町役場の文字が書かれたトラックを見つけた。そしてその前にある平家こそが、父の家だった。
澤井さんが僕を見つけて手を振った。
「こんにちは。ありがとうございます」
上下をジャージに纏った澤井さんの顔は晴れやかだった。昨日の喪服姿と対照的で、頭に巻いた手拭いがどことなく可笑しかった。
男の人が二人、もう既に家の中で作業に取り掛かっている。
「息子さん、来ましたよ」
澤井さんの声で二人が僕の方を向いた。二人とも爽やかな笑顔をしている。
「こちらは湯河原町役場の福祉課の柏木さんと室伏さん」
「どうも、父がお世話になりました」
僕は深々と頭を下げた。

「いえいえ、どういたしまして。この度はご愁傷様です」
二人とも汗をタオルで拭いながら、会釈する。
玄関から覗いただけでも、部屋の中は乱雑なのがわかった。これを片付けるとなると、相当に骨の折れる作業になるだろう。それに何とも言えない異臭が漂っている。それは死臭と腐敗臭か何かの入り混じったものなのだろうか。
僕は人生の終焉とは、もう少し清らかなもののような気がしていた。映画やテレビドラマなどで、人の死に際は美しく描かれることが多い。だから僕は乱雑で異臭のする屋内を見て、正直なところ戸惑いを隠せなかった。
それでも僕は気を取り直し、靴を脱いで家の中へ上がろうとした。
「あっ、靴は脱がない方がいいですよ。相当汚れていますから」
柏木さんが僕に声を掛けた。見ればみんな靴のまま家の中へと上がっている。父の家は僕の家でもある。そこを土足で踏み荒らされたような気がして、少し嫌な気分になった。だから僕だけは靴を脱いで上がった。
メリッ……。
足が沈むのがわかった。そして濡れたような感触が靴下を通じて足の裏に伝わる。
「あーあ、だから言ったのに」
既に畳は腐り、何かで濡れている。湿り気の正体が何であるかはわからない。しかし確かに濡れている。
それでも我慢して僕は奥へと進んだ。
部屋の中は一面に下着類や洋服が散乱していた。食べたまま丼などもあるようだ。
「単身の割には荷物が多いんだよな」
室伏さんがぼやくように呟いた。重いタンスを澤井さんと一緒にトラックへと運んでいる。以前は母の洋服などが入っていたタンスだ。
母は「あの家に置いてきた物に未練はない」といつか言っていた

が、果たして本心だろうか。昨日の母の様子を見ていると、少し不安になってきた。
僕は本棚に目をやる。そこには池波正太郎や藤沢周平などの時代小説がぎっしりと詰め込まれていた。週刊誌の類いは一切見当たらない。
「こんな物、出てきましたよ」
柏木さんが差し出したのは、何冊かのアルバムだった。
僕は感慨に耽るようにアルバムを次から次へと捲った。アルバムの中では父は真面目そうな顔を装い、母は絶えず笑っている。僕はおどけていることが多い。それはいつも暗くなりがちだった家庭の雰囲気を少しでも明るくしようという、子供心ながらの努力だったのかもしれない。
一段と古ぼけたアルバムがあった。まだ僕が生まれる前の、父と母だけが写っているアルバムだ。まだ二人とも若い。そこにいる二人は本当に幸せそうな笑顔を湛えていた。
(これだけは捨てられないな)
僕はアルバムを全部、バッグに仕舞った。少しバッグが膨れ上がり、パンパンになってしまった。それにかなり重い。しかし、帰りには心地よい重みになっているかもしれない。そんな気がした。
僕も荷物の搬出を手伝おうと腰を上げた。すると、何か布のようなものに足を取られた。
「うわっ!」
僕は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。よく見ると、僕の足を掬ったのは一枚のブリーフだった。
(これが親父の着ていたパンツ……)
僕の足を掬ったブリーフを摘まみ上げる。するとそれには大便と小便の染みが付着していた。
僕は阿部さんの「トイレに入るのも辛そうだった」という言葉を思い出した。おそらくトイレにも行けず、漏らしてしまったのだろう。苦しそうにもがきながら、這いずり回る父の姿が瞼の裏に浮か

んだ。それでも最後には母と僕を見つめ、苦しみを堪え、笑って死んだ父。
「お、お父さん……！」
急に製鉄所の溶鉱炉のように胸の中が熱くなり、一気にドロドロに溶けた鉄が吹き出しそうだった。それは涙腺を緩めて、僕の頬を伝わる。僕はこの時、込み上げる嗚咽を抑えることができなかった。
「うっ、うっ……」
父を棄てた大人が恥も知らず、泣き崩れた。僕の胸の中の溶鉱炉は、灼熱の涙を次から次へと作り続け、流し続けた。それは止まることを知らなかった。
だが、そんな僕を笑う者は誰もいない。
トラックから戻った澤井さんが、僕の肩にポンと手を添えてくれた。その手の温もりが暖かかった。ほんわかと優しい「気」の流れのようなものが伝わってくる。
「あなたは優しい息子さんですよ。ほとんどの場合は拒絶されますからね」
僕はクシャクシャの顔のままで振り返った。澤井さんは優しそうな笑顔でそこに立っていた。
「それにしてもお父さんの場合、発見が早くて良かったですよ」
澤井さんがしみじみと言った。
「発見が遅れると、どうなるんですか？」
僕は涙を拭いながら尋ねた。
「そりゃ、見られたもんじゃありませんよ。ムシに食われたりしてね」
「ムシ……ですか？」
「ウジムシですよ。以前に死後一カ月くらい経った仏さんを発見したことがあるんですけど、ミイラのようでね。布団と密着した部分だけ溶けかかって、ウジムシが溜まっていたんです。あれは強烈だったなあ。目玉なんか食われて無くなっていてね。しばらくの間、食べ物が喉を通りませんでしたよ」

澤井さんが顔をしかめた。その話を聞くと、父がそのような状態でなく、あの安らかな笑顔のまま発見されて、まだよかったと思う。
「残したい物があったら言ってください。後で取りに来てもいいですから」
澤井さんがそう言った。僕は大便と小便の付着したブリーフと、汗の染み込んだランニングシャツをビニールに包むとバッグに入れた。
不思議とそれが汚らしいとは思わなかった。
「いや、これだけでいいです。今の家は狭いですから」
「じゃあ、あとの物は処分しますよ」
僕は一呼吸置いて頷いた。
僕が幼い頃に沢山シールを貼った机も、室伏さんとトラックへと積んだ。話によると、真鶴の山の上にあるゴミ処理場に廃棄するのだとか。僕は思い出が軋む音を立てて壊されるような気がしたが、これぱかりは仕方がない。
「あー、これ終わったら大西で手羽先とチャーシューをつまみに一杯いくかなあ」
室伏さんが背伸びをしながら呟いた。
「ああ、あそこのワンタンメン、美味しいですよね。でも、あそこで飲んだことはないなあ」
澤井さんの顔からは汗が滴っている。それは早くビールでも飲みたいと訴えているようだ。
僕は先程食べた「味の大西」のワンタンメンの味を思い出した。そして楽しかった家族の思い出を。
（そうだ。思い出は胸の中にあればそれでいい。それで十分じゃないか）
そう自分に言い聞かせていた。
ふと、がらくたの山の中にフライパンがあるのを見つけた。母が昔使っていた鉄製のフライパンだ。僕は何げなくそれを手にした。どうやら父は、母と僕が逃げた後も、ずっとこのフライパンを使い

続けていたらしい。
生活保護費が少ないことくらいは僕にだって想像できる。おそらく父は自炊していたのであろう。このフライパンを使って料理をしていたに違いない。鉄に染み込んだ油が独特の光沢を放っている。
一体、父はどんな気持ちで、このフライパンを使っていたのだろうかと思う。侘しさを噛み締めながらも、去った家族の思い出にしがみつきながら、ひとり台所に立つ父の背中が見えた。
僕は柿澤先輩の「鉄を生かすも、殺すも使い手次第」という言葉を思い出した。そしてどんな思いを込められて、このフライパンは作られたのだろうか。
「すみません。このフライパンも持って帰ります」
さすがにフライパンまではバッグに入りきらない。それは手で持っていくしかない。東海道線の中でフライパンを剥き出しにして帰るのは少々恥ずかしいが、僕はどうしてもこのフライパンを持ち帰りたかった。

家の片付けが終わったのは夕方だった。
みんな最後には汗だくだった。トラックも家とゴミ処理場を何往復しただろう。
僕は父のために沢山の人が関わり、尽くしてくれたことを知り、感謝の気持ちで一杯だった。
きっと父も葛藤があったと思う。そして自分を責め続ける、悔悟の日々を送ったに違いない。そんな哀れな父の姿を見て、ここまで多く人たちが関わってくれたのだろう。
同時に、今まで父に何もしてこなかった自分が急に恥ずかしくなった。かと言って今更できることは限られている。
「あのー、澤井さん。父の葬儀代や片付けの費用なんですけど、私が出しますよ」
僕は声を忍ばせ、澤井さんの耳元で囁いた。
「ああ、片付けは費用がかかっていませんよ。すべて自前ですから

ね。葬儀の費用は……、弱ったなあ。葬儀屋さんに福祉でやるって伝えちゃったんですよ」

頭を掻きながらも、澤井さんの顔は笑っていた。

その後、僕は子供の頃によく遊んだ公園に立ち寄った。公園の隅に大きな、赤いタコの形をした遊具がある公園を、みんなは「タコ公園」と呼んでいた。

僕はベンチに腰を下ろし、遊ぶ子供たちに目をやる。無邪気に遊ぶ子供たちに、幼い日の自分が重なった。

タコの近くで男の子が泣いていた。どうやら母親に叱られているようだった。僕はその母親を見た。それは僕にとって忘れることのできない顔だった。

（あれは、昌子じゃないか……）

その母親は小学校三年生の時に、真鶴小学校から転校してきた青木昌子に間違いなかった。その顔を誰が忘れようか。

昌子は転校生ということで、最初はクラスでからかわれたり、仲間はずれにされたりしていた。子供の社会とは、ある一面で大人の社会より残酷なものである。

昌子の家はこのタコ公園のすぐ近くにあった。僕はひとりで彼女がタコ公園で遊んでいるのを、よく見かけたものだ。

僕は子供心にも昌子に同情していた。学校で理不尽な仕打ちを受ける彼女の姿に、家で辛い思いをしている僕自身の姿が、どことなく重なって見えたのだ。

ある日、僕は思い切ってタコ公園で遊ぶ昌子に「一緒に遊ぼう」と声を掛けてみた。彼女は少し強張った顔をしたものの、すぐにニコッと笑い、「うん」と頷き返してくれた。あの時の嬉しそうな彼女の笑顔は今でも忘れない。

それからというもの、タコ公園が昌子と僕の遊び場になった。

どこかお互いに惹き合うものがあったのだろう。ここでは嫌なことを忘れ、まるで傷を舐め合うように、暗くなるまで遊んだのだ。

昌子とは小学校から高校まで一緒だった。別に正式に交際をしていたというわけではないが、相変わらず仲は良かった。昌子と一緒にいると、家庭での嫌なことを忘れられ、ホッとできたのだ。僕が自然に振る舞える居心地のよい場所。それが昌子との時間と空間だった。

だから川崎へ引っ越した時、父から逃げられた解放感と同時に、僕は心の寄り処を失ったような気がした。それは何も告げずに去った、昌子への罪悪感を伴って……。

昌子はヒステリックな金切り声で子供を叱り付けている。男の子はベソをかきながら泣いていた。

「ママー、ごめんなさいー！」

だが昌子は膨れっ面を崩さない。

僕はベンチから腰を上げると、男の子の前にしゃがんだ。そして頭を撫でてやる。

「大丈夫だよ。ママだって許してくれるよ。ママにとって君は宝物なんだ。君にとってもママは宝物だよね？」

「うわーん！」

男の子は大泣きをしながら、昌子の腰に抱き着いた。昌子は困ったような顔をしながらも、そっと男の子の肩を抱いた。

僕は顔を上げ、昌子の方を見る。昌子は僕が誰だかすぐに気付いたのだろう。口に手を当て、目を丸くしながら「あっ！」と叫んだ。

「光ちゃん……？」

「そうだよ」

僕は笑顔を返した。昌子はまだ信じられないといった表情をしている。

「久しぶりだね」

しかし昌子は答えることなく、そのまま固まってしまった。

夕暮れの公園にやるせない空気が流れた。

どれ程の沈黙が続いただろう。突然、昌子の頬から一筋の涙がこぼれた。

「どうしたの？　ママー」
昌子は子供の肩に手を置きながらも、ボロボロと涙を流し続けている。
「光ちゃん、やっと帰ってきたてくれたんだね」
そう言った時には、昌子の顔はクシャクシャに近かった。
昌子と僕は公園のベンチに座った。男の子はまた無邪気にタコの遊具で遊びだしている。
「実は親父が死んでね」
僕から話を切り出した。
「そうなの。お父さんから逃げたっていう噂を聞いていたけど、本当だったの？」
「ああ、お袋がいつも親父に殴られていてね。それで逃げたんだ。俺は今、川崎の製鉄所で働いているんだ。お袋と二人暮らしさ。親父はこの湯河原で生活保護を受けていたんだ。福祉事務所から連絡があってね」
「そんなお父さんでも、最後を看取ったの？」
「まさか。孤独死ってやつさ。今日は家の片付けに来たんだ。でも不思議なものでなあ、親父の死に顔を見たり、家を片付けたりしているうちに何だか親父が哀れに思えてさ」
「そう……」
昌子が寂しそうに呟いた。僕はその声に、思わず昌子の横顔を見た。夕陽に照らされたその横顔は、ひとりで寂しそうに遊んでいた、あの時の昌子の横顔にそっくりだった。
「ところでマーちゃんの旦那さんって、どんな人？」
僕がそう尋ねると、昌子は一呼吸置いてから口を開いた。
「別れたわ」
「えっ？」
「もともとチャランポランな人だったの。まあ、子供ができちゃったから、何となく一緒になったって感じかな。でも、あいつは変わらなかった。結局、あいつ、覚醒剤に手を出して逮捕されてね。そ

れで離婚を決意したのよ」
昌子は無表情に語った。
「じゃあ、今は母子家庭なのかい？」
僕は昌子の顔を覗き込むようにして尋ねた。
「うん。実家に身を寄せているの。私もチボリで働いているけど、それだけでは食べていけないから、結局、今でも親のスネを齧ってる」
そう言う昌子の視線は宙を泳いでいた。おそらく自分でも、この先どうしたらよいのかわからないのだろう。
ちなみにチボリとは湯河原にあるクッキー工場で、近くを通ると甘い匂いが漂ってくる。
「はあーっ、私たち、これからどうしたらいいんだろう？　最近、ちょっとしたことでイライラしてついあの子に八つ当たりしちゃうのよ。光ちゃんの言う通り、あの子は宝物なんだけどね」
昌子が頭を抱え、掻き毟った。昔から自慢の長く、ストレートの髪が乱されていく。それはまるで己自身を傷つけているかのようだ。昌子を良く知る僕としては、見るに忍びない光景であった。
「はあー、何で光ちゃん、私の前から突然、消えちゃったのよ？」
「えっ？」
唐突な昌子の問いかけに、僕は一瞬、言葉を失った。
「あれからというもの、私の人生、狂いっぱなしよ」
「マーちゃん、もしかして俺のこと……」
「当たり前じゃない。男って本当に鈍いんだから」
昌子の瞳がまた潤みだした。
「ごめんよ」
ジーンズの上で硬く拳を握る昌子の手の上に、僕はそっと掌を置いた。拳がプルプルと震えるのがわかった。
「うわあああーん！」
突然、昌子が大声を上げて泣き出した。男の子は母親の異変を逸速く察知し、タコの遊具から駆け寄ってきた。

「ママーッ、どうしたの？」
子供の不安げな表情が切ない。
「何でもない、何でもないのよ……」
昌子は子供にそう言うが、時折、ヒックヒックと肩が痙攣している。
「大丈夫だよ……」
僕が男の子の頭を撫でてやった。
「この子の父親が光ちゃんだったらよかったのに……」
僕はその言葉に心臓がドキッとした後、ギューッと締め付けられた。
夕日に照らされた昌子の涙は悲しくも、どこか美しい。
僕は男の子の顔をまじまじと見た。あどけなく、可愛い顔をしているではないか。
「君、名前は？」
「貴」
「いくつ？」
「みっつ」
男の子は僕の質問に素直に答えてくれた。その瞳はまだ穢れを知らない、無垢の瞳だ。
「ねえ、携帯電話、持ってる？」
僕が昌子に尋ねると、彼女はジーンズのポケットから、デコレーションされたいかにも女の子らしい携帯電話を取り出した。
「よかったら、番号とアドレスの交換をしようよ」
昌子は「への字」になった口元を緩め、少しはにかむように笑うと、「うん」と小さく頷いた。だが頬は化粧が落ち、グショグショだった。
お互いに携帯電話を弄くる。その間、僕は子供の頃、昌子がよくうちに電話を掛けてきたことを思い出していた。
（そう言えば、あの時も昌子から電話が掛かってくるのを、ウキウキしながら待っていたっけ）

僕はあの頃から昌子のことが好きだったのかもしれない。単に幼なじみという言葉では片付けられない、思慕のような感情を抱いていたのだ。黒電話の前で齧り付くようにして、昌子からの電話を待っていたあの頃の感情が沸々と甦る。

「今日は会えてよかったわ。よかったら電話して」

そう言う昌子の顔は晴れやかだった。僕が初めて声を掛けた時の、あの笑顔に似ている。

「必ずするよ。でも俺たちには黒電話の方がお似合いかもな」

「着信音だけでも黒電話にしておこうか？」

「あっ、それいいかも」

二人で和やかに笑った。

「ところで、どうしたの？　そのフライパン」

やはりフライパンは昌子の目にも異様に映るらしい。

「片付けた荷物の中にあったのさ。お袋が使っていたやつでね。俺たちが引っ越した後も、親父が使っていたんだ」

「それをお母さんに？」

「うん。それもあるけど、俺、製鉄所で働いているから、お袋の思いと、親父の思いが詰まった、この鉄のフライパンがそのまま捨てられるのが、何となく忍びなくってさ。それにこれを作った人も悲しむだろうなって」

「そっか。マーちゃんは相変わらず優しいね。それに、自分の仕事に誇りを持っているなんて立派だな」

「そんな立派なもんじゃないよ」

僕は照れながら微笑み返した。

だが、この公休が明けて製鉄所で鉄に向かう僕は、昨日までの僕とは違う。レバーを引く度に、このフライパンを思い出すに違いない。

それから昌子親子を家まで送った。貴を挟み、三人で手をつなぐ姿は、知らぬ人が見れば、仲の良い親子に見えても不思議はないだろう。

父の死後で不謹慎かもしれないが、こんな幸せがあってもいいと思った。父には果たせなかった、幸せな家庭を築きたいと思った。
（この子なら、自分の子として愛せるかもしれないな）
貴のあどけない笑顔を見て、ふと、そんなことを思った。貴も僕に屈託のない笑顔を向けてくれる。
貴が誰の子でも、この際、関係はない。昌子とならば、幸せを掴めそうな気がした。それはまるで、磁石のＳ極とＮ極が引き合うように、自然と惹かれ合うものかもしれない。
昌子の家の前で僕は二人に手を振った。
「お兄ちゃん、また会おうね」
貴がにっこりと笑い、大きく手を振る。
「夕方だったら、だいたい空いているから、電話ちょうだいね。メールはいつでもＯＫよ」
昌子ははにかみながら、小さく手を振る。
「ああ、必ず黒電話を鳴らすよ。それから、もしよかったら、このフライパンを使ってくれないか？」
「えっ、でも大切なフライパンなんでしょう？」
「マーちゃんに使ってほしいんだ……」
昌子はしばらく僕の目を見つめた後、コクリと頷いた。そして微笑む。
「私でよかったら、使わせてもらうわ」
「ありがとう」
僕は夕陽に照らされて、プリズムのような光沢を放つフライパンを、昌子に手渡した。鉄は熱を伝え易い物質である。その鉄を通じてお互いの体温はおろか、気持ちまでが伝わるようだった。
「じゃあね」
僕はメトロノームのように手を振って歩きだした。
角を曲がるまで、何度も昌子の家を振り返る。昌子も貴もずっと僕を見送り、手を振っていた。僕も振り返る度に手を振る。
角を曲がるのを躊躇った。しかし今はここで足踏みをしているわ

けにはいかない。僕は断腸の思いで、曲がり角の一歩を踏み出した。

僕は茜色に染まった湯河原の町を駅の方へ向かって歩き出した。するとタコ公園の前をもう一度通ることになる。再び公園内に足を踏み入れると、タコの遊具に歩み寄った。そして思い出の染み込んだ、コンクリートの赤いタコをそっと撫でる。

過去の思い出だけではない。これからも思い出を重ねていくタコかもしれない。そんな思いでタコを撫でた。

そしておもむろに携帯電話を取り出すと、着信音を黒電話に変更した。そして黒電話が何回か鳴った後に、あのフライパンが僕のところに戻ってくるような気がした。女の予感は当たるというが、時には男の予感だって当たる時がある。

最終話

公園を後にし、再び歩きだした僕は喉が乾いていることに気が付いた。
（そうだ。もう一度、大西に寄ってみよう）
ふと、そう思いついた。室伏さんも「味の大西」に行くと言っていた。もしかしたら会えるかもしれない。
いつの間にか、速足になっていた。
信号の角にある「味の大西」の自動ドアをくぐると、お店のお兄さんが「いらっしゃい」と元気な声を掛けてくれた。昼間と違い、客はまばらだ。
「あれ、お兄ちゃん、昼間も来なかった？」
お店のお兄さんは客の顔をよく覚えているらしい。
「今は空いているから、テーブルでもカウンターでもいいよ」
僕は奥の座敷を覗き込んだ。思った通り、そこには澤井さんと柏木さん、それに室伏さんがいた。みんなチャーシューや手羽先をつまみにビールを煽っている。
「先程はどうも」
僕が声を掛けると、真っ赤な顔をした室伏さんが、人懐っこい顔で手招きをする。
「こっち、こっち」
「混ぜてもらってもいいですか？」
「もちろんですとも」
澤井さんが爽やかに笑った。
「お兄ちゃん、何にする？」
お店のお兄さんが注文を聞いてきた。
「焼酎をもらおうかな」
「割るものは？」
「いらない」

「じゃあ、氷と水でいい？」
ここの焼酎は酒屋で売っているようなカップの焼酎をそのまま出す。それを自分の好みのもので割って飲むのだ。
親父はいつもカップのまま、一杯目はグーッと飲み、二杯目からはチビチビと飲んでいた。
「今日はどうもありがとうございました」
僕は正座をし、改めて澤井さんたちに頭を下げた。彼らにはいくら感謝の意を表しても限がない。
「いいんですよ。これが私たちの仕事ですから」
澤井さんがにっこり笑って言った。最初に彼から電話が掛かってきた時との距離は確実に縮まり、旧知の仲のように思える。柏木さんも室伏さんもそうだ。
それにしても、このような仕事をしている人がいたとは正直なところ驚いた。公務員とは部屋の中で書類を書いているものばかりだと思っていた。しかも、澤井さんの顔に悲壮感は漂っていない。
「いやー、今日の片付けはしんどかったけど、良かったなあ。こうやって息子さんも来てくれたし」
柏木さんが真っ赤な顔をして笑った。彼の顔も爽やかだ。
「終わり良ければすべて良し、ですね」
室伏さんが振り向き様にビールのおかわりを注文する。
程なくしてビールと焼酎が運ばれてきた。
「じゃあ、改めて献杯」
僕は焼酎のカップを、三人はビールのグラスを掲げた。
僕は焼酎に映る自分の顔を眺めた。自分で言うのも変だが、憑き物が取れたような、晴れやかな顔をしている。
（お父さん、もう許してやるよ）
心の中でそう呟くと、僕は焼酎をグラスに空けることなく、カップのままグーッと飲み干した。
「おお、やるねえ」
僕が焼酎を飲む様を見て、柏木さんが驚いたように言った。

「親父がよく、この店でこうやって飲んでいたんですよ」
「なるほど、お父さんに捧げる一杯ってわけですか」
柏木さんが微笑んだ。
「すみません。焼酎のおかわりと、おしんこ、チャーシュー盛り合わせに手羽先八本！」
僕はお店のお兄さんに大声で注文した。
「今日は私がおごりますよ」
僕がそう言うと、三人とも一斉に首を横に振った。
「だめだめ。今は厳しいんだから。収賄でクビになっちゃうよ」
室伏さんが少し呂律の回らない口調で固辞した。
「そうそう。町の年間予算くらいの札束ならともかく、ビールとおつまみでクビになったらつまらないもんね。割り勘ね、割り勘」
柏木さんも同調する。
「一層のこと、県の年間予算くらいにしたらどうですか？」
澤井さんが苦笑して言った。一同で大笑いする。
そこへ焼酎とつまみが運ばれてきた。僕は焼酎をチビチビと啜り始めた。
「さっきの勢いはどうしたんですか？」
室伏さんが冷やかすように笑った。特に悪気があったわけではないことはわかっている。
「親父はね、二杯目からはチビチビやっていたんですよ」
「そうでしたか」
僕は先程からあまり喋らない澤井さんの顔を見た。彼は冗談話を交えて、笑う柏木さんと室伏さんを見てニコニコしながらビールをチビチビと飲んでいる。
「澤井さんのお仕事って辛くありませんか？」
「そりゃあ、辛いことの方が多いですね。よく苦情も言われるし、時には体を張ることだってあります。仕事の九割は苦しいかな」
それでも澤井さんは笑顔を絶やさない。
「よく続けられますね」

僕は真剣な顔をして澤井さんの目を覗き込んだ。だが彼の目は優しそうに笑っている。
「ふふふ、今回みたいなことがありますからね。だから続けたくなるんですよ」
澤井さんの目はまるで僕に感謝をしているようだ。感謝をしなければならないのは僕の方なのに。
「どんな仕事でも、真剣に打ち込めば辛く、苦しいものですよ。家族や守らなければならないものが増えれば肩にその分、余計な重みも加わるし」
澤井さんのその言葉に、製鉄所の仕事が重なる。それは柿澤先輩の仕事の哲学に似ているような気もする。
そしてフライパンで決意した新しい自分。
(明日からの俺は違うぞ!)
そう自分に言い聞かせる。
「人だって、この混沌とした現代で生きていくのは大変な状況ですよね。バブルが崩壊してから保護率も上がりましてね。今は横ばいですが、全国平均でも百人に一人くらいは生活保護を受けている計算になるんですよ」
「そ、そんな数になるんですか。で、湯河原はどうなんですか?」
「まあ、これ以上のことは私も守秘義務や町のことがあるので言えませんが、それだけ貧富の格差が拡大し、低所得層が多いってことですよ」
僕は摘まみかけたチャーシューを口に運ぶのも忘れ、澤井さんの話に聞き入った。
湯河原町の保護率を調べることなど、統計の数字を見れば一目瞭然だ。それでも彼が言葉を濁したのは、父を通じて生活保護に片足を突っ込んだ僕と、町のイメージへの配慮なのだろう。
ただ、今の僕には保護率など問題ではない。父の死を受け止め、未来へ向かって誠実に、そして確実に歩いていくことが大事なのだ。そういえば、昌子もチボリの収入だけでは食べていけないと言って

いた。もし頼れる実家がなければ、彼女も生活保護を受けていたのだろうか。
「何か、人の温もりとか、絆とかそういうものが希薄になっているような気がするんですよね。だから、昨日と今日、光治さんが来てくれてホッとしているんです」
「私もようやく父を許す気になれましたよ」
チャーシューを口へ運び、半分位に減った焼酎を眺める。そこにあの日の父が浮かぶ。
「湯河原はどうですか、湯河原は？」
酔いの回った柏木さんが、身を乗り出して尋ねてきた。
「正直言って、昨日までは鬼門だったんですけどね。今日は改めてすばらしい故郷であることを実感しましたよ」
「よっしゃあ！」
柏木さんと室伏さんが腕を組んだ。
僕の心の中は、喉に刺さった魚の骨のようだった父の存在に一区切りをつけられたことと、昌子との再会の喜びで満たされていた。
昌子と再会できたのも、もしかしたら父が編んでくれた運命の糸なのかもしれない。思わずポケットの携帯電話を確認してしまう。昌子親子が側にいてくれたら、おそらく仕事への意欲も更に上がるに違いない。
何かの歯車が動き出していることは確かだった。
気が付いたら、僕の焼酎は空になっていた。三人のビールも残り少ない。
「俺たちも焼酎にするか」
柏木さんが焼酎を注文する。さすがにストレートとはいかず、烏龍茶で割るようだ。僕も焼酎の追加を注文する。
「強いですねえ」
澤井さんが呆れたように言った。
「さあ、さっきは光治さんのお父さんに献杯をしたから、今度は光治さんの今後と、我々の今後の発展を祝して乾杯をしようじゃない

か」

柏木さんが明るい声で言った。

程なくして運ばれてきた焼酎。三人はそれぞれ自分で烏龍茶割りを作る。普通、町の職員が県の職員のグラスに注いだりするものだと思っていたが、そんなことは一切しない。それぞれ思い思いにグラスに注ぐ仕草が自然で、少しもいやらしくなかった。

「それじゃあ、今度は乾杯！」

三つのグラスとひとつのカップがまたぶつかり合う。

言葉を超える、打ち解け合った空気がそこにあった。父との関係もただ和解という言葉で片付けられるものではない。

そして今日から故郷として復活した湯河原。また、これからも昌子を通じて関わっていくであろう湯河原に思いを込めて、ストレートの焼酎を啜った。

（了）

最終話（後書き）

この作品は第七回湯河原文学賞で最終候補まで残った作品です。
最終話までお付き合いいただいた方々、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3941i/

僕が許した父

2010年10月8日15時14分発行